

『臆病な束縛者』

著：魔鬼砂夜花

ill：タカツキノボル

「えーっと、たぶん、四日ぶり？ これ、僕の後輩。可愛いでしょ」

語る沢木の声以上に、男の見た目は華やかだ。長身、茶髪で洒(しゃ)落(れ)たスーツを着崩して、胸や腕には銀のアクセサリーが光っている。たぶん、ハーフなのだろう。いかにも優男風な美形だが、彫りが深い。

いかにも肉食系の遊び人だ。よりもよって、こんな男にどうして、と。思うよりも早く、ぐいと身体を押し出された。

「僕、ちょっと飲み物買ってくるから。彼の事、よろしくね」

…え？ え？ ちょ、ナニソレ!?

抗議の声はおろか。三原が状況さえ全く飲み込めないうちに、沢木の姿はかき消える。

来る時は、まるでモーゼが割った海のように彼の周りには空間が出来ていた筈(はず)なのに、今はその片(へん)鱗(りん)さえ見いだせなかった。

元々、沢木も三原も背が低い。人の多い場所では、誰かを見つける事も、誰かに見つけられる事も容易(たやす)くはない。しかも今日は金曜日だ。店の中は多くの客で賑わっている。

「ねえ、君」

突(とつ)如(じょ)、耳元で声がして、三原はビクリと飛び跳ねた。

いや、近い。近い。近いからっ！

声もだが、男の顔は、至近距離で見するには少々整いすぎている。それなのに、わざわざ身を折って問いかけられ、三原は胸中悲鳴を上げた。

「彼の後輩って、ホント？」

「は…はいっ」

少しでも離れて欲しくて即答する。

とはいえ、たった一言では間が持たない。なので、聞かれていない事までも、勢いペラペラ喋(しゃべ)る羽目に陥った。

「大学で、いくつか授業が一緒になって、それで」

喋りながらもチラチラと視線は沢木を捜し続ける。

「僕が好きな作家の本を読んでたら声かけてきてくれて、で、その作品にちなんだ場所があるからって誘われたんですけど…」

それでゲイバーに連れて来られるとは夢にも思っていなかった。

そう続ける三原の言葉を遮って、男の身がまたもや沈んだ。

「なんて本？」

「は？ え？」

逆に、三原は背を反らして逃げをうつ。

「だからその本。なんて本？」

「あ、あの、『いばら姫の溜息』っていつて…」

再び三原が言葉を終える前に、クスリと笑って男が遮る。

「また、随分前の本だねえ」

ええ、でも、と反射的に答えてから、はたと三原は瞬いた。

「もしかして知ってんですか？ 『いばら姫』」

問う声に、知らず力が入ってる。最早男への、苦手意識など微(み)塵(じん)もない。

「勿論」

「凄いや。これ、知ってる人って少ないのに」

作者の知名度に反し、この作品は知名度が低い。常々三原はその事を、酷(ひど)く悔しく思ってきた。何故ならば。

「俺、これが一番好きなんですよ」

反ってた背中が今は逆に、前のめりにすらなっている。

「だってこれが一番切ないじゃないですか」

そう。この話は酷く切ない。ただし、内容はサイコが跋(ばつ)扈(こ)する猟奇殺人話である。

「イカレ具合も一番だけどね」

「だとしても、です」

それでも、何度読んでも三原は泣けるし、読んだ後、こんな風に人を好きになるというのは、どんなものだろうかと思ってしまう。

「それに、サイコものの大家がよりサイコ度が高いものを書いたからって、なんだって言うんですか。むしろ、ファンならどんと来いって話ですよ」

「そんなに好きなの？ その作家」

「ええ、大好きです」

好きという言葉では足りない程に。

満面の笑みを浮かべて言い切る三原に、男は何故か、ニコリと笑って宣った。

「そう、ありがとう」

へ？ なんで？ なんでここで、ありがとう？

ここは普通、自分も好きだとか、実は嫌いなんだとか、そういう展開になるんじゃないのかと、巨大な疑問符と共に思った三原の目に、男の形のいい手が飛び込んできた。

「与(よ)野(の)要(かなめ)。烏(からす)、と呼ぶ人の方が多いけどね」

三原の手より、かなり大きい。指の長さからして全く違う。

いや、そうじゃなく。

「烏…って、まさか」

「そうこの人が。君が大好きな夜(よ)野(の)烏大先生」

不意に、ぬっと沢木が顔を出す。

「ね？ ここ、すっごく良いトコだったでしょ？」

僕に感謝しなさい、とケラケラ笑って続けながら、沢木はグラスの一つを差し出した。「で、これが本の中に出て来るお酒。ただし、話の中のと違って飲みにくいから人気なかったりするけどね」

作中の通り綺(き)麗(れい)な青色をしたお酒だ。サワー系らしく泡がグラスの中で舞っている。

「ま。そんなだからコアなファンにも知られていない、超レアな一品なんだよね。どう？

こういうの、好きじゃない？」

勿論好きだ。大好きだ。

だがいきなりすぎて、頭の中はまっしろだ。

気がつけば、中身が半分程になったグラスが手の中にあった。

「で？ 大好きな先生と握手、しなくていいのかなあ？」

「んな訳ないじゃん」

絶対したい。むしろこちらの方からお願いしたい。でも何故か、グルグルと視界が回っているような気がしてならない。

「だったらなんでしないの？ 握手。さっきから先生、ずっと待っててくれるのに」

揺れる視界の真ん中に、大きな男の手が浮かぶ。その先にある笑顔と身体はどう見ても、作風とは違っているが。

とりあえず、引っ込められる前に握ってしまわなければ、と三原は彼の手を掴んだ。

やっぱり大きい。しかも見た目よりも温かい。

しっかりと。力強く握られて、三原の体温もドクリと上がった。

アルコールと炭酸で焼かれた喉が、酷く熱い。

更に男の顔が近づいてくる。息が掛かる程の距離になっても、男の美形度合いは変わらない。笑顔は至極甘ったるいし、仕草もいかにも遊び慣れている。どこをどう切り取っても、あんなヤバイ代物を、書いている男には思えない。だがしかし。

こちらを見つめる瞳だけが、異様な光を帯びている。

「ねえ。君をいばら姫みたいに、愛しちゃ駄目かな？」

いや、だから。駄目とか、駄目じゃないとか、そういう問題じゃなくて。その顔で、その台詞(せりふ)は、毒がありすぎてヤバイから。

目が回る。グルグルと世界が大きく回り揺れる。

揺れて、落ちて、沈み込み、時にふわりと浮かんで、また潜る。

叶う事ならいつまでも、心地よく微睡(まどろ)み続けていたかったが、生(あい)憎(にく)くとそういう訳にはいかなかった。

酔いが覚めてくるに従って、知性と感覚とが戻ってくる。

それでも、心地良さは続いていたが、同時にそれは酷く切迫した欲求をも伴っていた。

荒い呼吸と共に、欲望の丈を吐き零(こぼ)す。

ぼんやりとした達成感と共に感じたのは、ずしりと身体にのし掛かってきた疲れだった。

…重い。

暖かいけど、身体が重い。寝返りを打とうとしてそれすら出来ず、三原は気(け)怠(だる)さと戦い瞼(まぶた)を持ち上げる。

輪郭の緩い視界の端で、何かがゆらゆら揺らめくのを、暫(しば)し彼はぼんやり見つけた。

茶色なのか、金色なのか。柔らかな髪が、光に透けて凄く綺麗だ。

無意識にその髪に触れようと手を伸ばしかけ、それが思うように動かない事に気付く。

「…あ？」

何故か両手が頭上で一つに纏(まと)められている。縛られ、どこかに繋がれている

らしい。

二度三度。動かそうとして失敗し、意識が一気に覚醒した。
と同時に全身の感覚が、脳にまで到達する。
暖かくて重たかったのは、誰かに組み敷かれているからだ。

本文 p11～19 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>